

# 下野市立祇園小学校

## 1 学校課題

自分のよさを生かし、互いに学び合い高め合う児童の育成  
～他者を尊重し、コミュニケーションのよさを実感できる指導の工夫～

## 2 研究計画

### (1) 主題設定の理由

子どもたちが「生きる力」を身に付け、個として確立すること、確立した個が身に付けた能力をさらに伸ばすことで自信をもち、そこで得た力がその後の自らの人生を切り開く力となっていくことを「自分のよさを生かす」と捉え、研究主題を構成する一つの視点とした。また、これからの社会を生きる中で出会う課題や困難を乗り越えていくためには、一人の力だけではなく、複数の力を合わせて立ち向かっていく必要がある。そのためには、学校教育において、他者の気持ちを理解し、互いに認め合える子どもたちを育てていくことが重要であると考え、「互いに学び合い高め合う」を研究主題のもう一つの視点とした。今年度初めて、研究教科・領域を外国語及び外国語活動、英語活動とし、他者を尊重しコミュニケーションのよさを実感できるような指導の工夫に取り組むことで主題に迫る。昨年度までの算数・理科での研究の蓄積を生かしながら、研究を深めたい。

### (2) 研究の仮説

外国語科及び外国語活動、英語活動において、自分の思いを伝え合う喜びを実感できる言語活動を充実させ、児童が他者を尊重し、主体的に英語でコミュニケーションを図るような授業づくりをすることができれば、自分のよさを生かし、互いに学び合い高め合う児童を育成することができるであろう。

## 3 研究内容

### (1) 具体的方策

- ① 単元計画の工夫  
自分の思いを伝え合う喜びを実感できる言語活動を設定した。
- ② 他教科との関連  
他教科の学習内容を生かすことで、外国語への積極性を高めた。
- ③ タブレットなど ICT を活用した授業実践  
子どもたちの思考や表現を助けるツールとして、また、教師の効果的な指導のためのツールとして活用した。
- ④ 授業研究会の充実  
参加者全員で子どもの学びの様子を見取り、語り合える授業研究会を工夫した。授業研究会で得たことを、明日からの授業に生かすため、各自、アクション宣言を書いて、見えるところに掲示したり、学習指導主任が通信としてまとめて配付したりした。

### (2) 授業公開を通じた主題への取組

- ① 研究授業  
指導案検討は、低・中・高学年の各ブロックで行った。

月日	学年	単元名	課題追究のための手立て等
6/29	2年	Vegetables	ペアで伝え合うための場面設定の工夫
9/14	4年	This is my favorite place	他教科との関連や相手意識の工夫
12/14	6年	My Best Memory	伝えたいことを伝えるための工夫や相手意識の工夫



【写真① 2年生の授業の様子】



【写真②研究会の様子】



【写真③ 6年生の授業の様子】

② 一人一授業公開

学校課題の具体的方策を踏まえ、6月から1月までの間に、外国語に関する授業を実践した。

## 4 本年度の成果と課題

5・6年生の外国語、3・4年生の外国語活動は、学習指導要領の改訂により、令和2年に新設された教科・領域である。また、本校においては、研究初年度であるため、「外国語等の指導案を初めて作成した」とか、「自分以外の外国語の授業を初めて見た」という教員も多くいた。そのため、今年度は、指導案を作成して授業を実践したり、様々な授業を見たりすることができた、ということが一番の成果であるとする。以下、主な成果と課題を述べる。

(1) 研究の成果

①Small Talk、教師のデモンストレーション、友達とのやりとり、中間の振り返り等、授業の流れが定着してきた。

②「ペアの友達とおつかいごっこをしよう」「〇年生に伝わるように紹介しよう」「〇〇小学校の友達と交流を深めるために」といった、目的・場面・状況を明確に設定した単元計画をした。「何とか伝えたい」という思いから、児童が、英語（ジェスチャーやICTも含む）を使って、主体的にコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた。学年によっては、コミュニケーションデイもプレゼンテーションの場として活用した。

③一人一授業では、年度当初に時間割編成を工夫してお互いの授業を見合える環境を整えた。そのため、特別支援学級も含めて全学級で外国語に関する授業を公開し、多くの教師が参観することができた。それにより、発達段階に応じた指導のイメージをもつことができた。

(2) 研究の課題

①中間の振り返りでは、難しくて言えないことを取り上げたり、意図的指名をしたりして、それ以前と以後で児童の変容が見られるよう、教師のコーディネート力を向上させる必要がある。

②教師はICTを使う場面を設定し、児童は、意欲的、かつ効果的に活用する姿が見られた。今後は、本当にその場面でICTが必要かさらに検討し、より有効なICTの活用について考えていく必要がある。

③小中一貫教育研修外国語部会での話し合いにより、中学2年生が小学6年生に、英語で中学校の部活や行事について紹介する授業を行い、本校児童にとっても貴重な機会となった。来年度以降も継続し、さらによりよいコミュニケーションの場となるように改善していきたい。小中連携も、相手意識をもたせる上で有効であるとする。

④一人一授業に関して、授業後のリフレクションは、時間短縮のため、参観者が授業者にコメントを書いて渡すことで行った。しかし、できるだけ多くの授業を参観しようとする、負担感も伴うため、来年度は、指導略案を配付する際に、最も参観してほしい時間帯を記したり、重点ポイントを周知したりして、短い時間の参観でも効果的に学び合える機会となるようにする。

⑤高学年では、自分の伝えたいことを伝えられるようにするため、書く活動をする際のワークシートを自作した。さらに、工夫をし、よりよいものを作っていく。